

アンジュ・ミケーレ

ヴェネツィアで生まれ育ったアンジュ・ミケーレは、聴覚障害をもつ特別な身体と自意識のシェルターに護られた精神を抛りどころに、この苛烈な現実世界を凝視し、湧きあがる創作の声に従って、日々弛まず絵画を描いている。作家の心身と作品世界は分かちがたく、まさに「生の」表現である。明快でためらいのない筆使いで、目に映る自然の光景を短時間で一気に描ききる。

「むかしむかしあるところに 美しい光の国がありました。それはそれは清らかな 気が満ちた不思議な世界でした」

そう彼自身が言葉を寄せた本作は、これまで以上に冴え冴えとした銀色とブルーの光を纏った。抽象と具象の間にあるイメージと構図は、そこから何か寓意めいた気づきを得ようとする者に情緒の攪乱をもたらし、経験と認識に依存した深読みを清々しいほどきっぱりと跳ね返す。アール・ブリュットの系譜というよりはむしろ、美学的交信のためのセンシングスキルを鑑賞者に要請するという、高度な挑戦をしているのだ。

住吉智恵 （アートプロデューサー、RealTokyo ディレクター、ジャーナリスト）

2020年3月